

実践例

群馬県立高崎女子高校

全教師で自校のあり方を議論し、活動の目的を共有。 生徒の「自立」を組織的に支援する

1年をかけて

全教師の目線を合わせる

群馬県立高崎女子高校は、校内でスクール・ポリシー（以下、SP）とSAHについての議論を、23年度の1年間をかけて次のように行った。

まず、23年6月に全教師参加の校内研修を実施し、SAHの趣旨を教師間で共有した上で、自校の現状と課題、生徒に身につけてほしい資質・能力について話し合った。次に、管理職と各分掌・学年の主任、有志の教師が参加する「コア会議」において、前述の研修で出された意見を整理し、グラデュエーション・ポリシー（以下、GP）の原案を作成。教師から原案への意見を募った。そして、寄せられた意見を踏まえた改訂案を9月の職員会議で提案し、承認され、GPが確定した（図3）。9月に行った校内研修では、SAHの具体的な取り組みについて話し合った。土曜講座の見直しや複数担任制、

行事運営への生徒の参画など、様々な

取り組みのアイデアが出され、分掌内やコア会議で内容を検討。10月の校内研修で再び議論した後、12月末のコア会議で取り組みの原案をまとめ、24年2月末の職員会議に提案し、承認された。そして、SAHの具体的な取り組みを踏まえてカリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを策定した。

そうして策定されたSAHの実施計画は、24年3月に教師や生徒、保護者、学校外に周知された。さらに各取り組みの概要などをまとめた「SAH計画書」を作成し、全教師に配布。4月には、複数の分掌が関係する取り組みを調整したり、コア会議の議論をまとめて周知し、校内から意見を募ったりする役割を担う「SAH統括室」を設けた。丸橋寛校長は、組織づくりや運営方法、教師間の目線合わせを大切にしたいと語る。

「コア会議は週1回実施し、23年度の実施回数は実に40回に上りました。

図3 グラデュエーション・ポリシー（GP）

自立

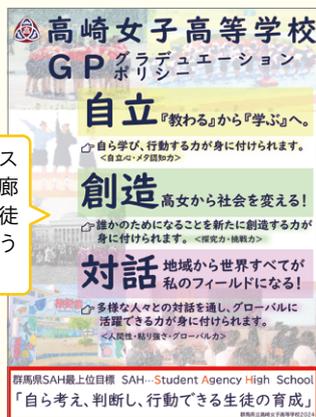
「教わる」から「学ぶ」へ。
自ら学び、行動する力が身につけられます。
〈自立心、メタ認知力〉

創造

高女から社会を変える！
誰かのためになることを新たに創造する力が身につけられます。
〈探究力、挑戦力〉

対話

地域から世界すべてが私のフィールドになる！
多様な人々との対話を通し、グローバルに活躍する力が身につけられます。
〈人間性、粘り強さ、グローバル力〉



GPを掲げたポスターを教室や廊下に貼り、生徒が意識できるようにしている

※学校資料を基に編集部で作成。

少人数での定期的なコア会議と、全教師による校内研修において様々な視点で話し合う中で、取り組みの目的が共有され、SAHへの理解も深まりました。さらにSAH計画書で取り組みの概要について目線合わせをし、SAH統括室が分掌間の連携や調整を図ることで、様々な取り組みは真に組織的なものとなり、かつ迅速に実施できるよ

うになったと考えています」
「自立・創造・対話」というGPの背景にある思いについて、SAH統括室長の中村理恵先生は次のように語る。
「本校の生徒は、教師からの課題や指示をしっかりとこなす一方で、見通しを持って主体的な学びを展開することが多少弱く、『自立』が不十分でした。また、多忙により、社会とのつながりが乏しいからか、自ら社会を変えていくビジョンを描く点に弱さがありました。一方で、将来はグローバルに活躍

生徒の実態を踏まえ、

「自立・創造・対話」をGPに

「自立・創造・対話」というGPの背景

にある思いについて、SAH統括室

長の中村理恵先生は次のように語る。

「本校の生徒は、教師からの課題や

指示をしっかりとこなす一方で、見通し

を持って主体的な学びを展開すること

が多少弱く、『自立』が不十分でした。

また、多忙により、社会とのつながり

が乏しいからか、自ら社会を変えてい

くビジョンを描く点に弱さがありました。

一方で、将来はグローバルに活躍

なぜ育む? 「見えない力」



吉田恵美
進路指導主事
よしだ・えみ
同校に赴任して9年目。理科(生物)。



中村理恵
SAH統括室長
なかむら・りえ
同校に赴任して5年目。地理歴史・公民科(地理)。



青木瑞代
教師
あおき・みずほ
同校に赴任して1年目。



丸橋 覚
校長
まるばし・さつお
同校に赴任して2年目。

したいという生徒が多いのも、本校の特徴の1つです。そこで、『自立』し、社会とつながりを持って多様な人と『対話』し、社会を変えられるような『創造』ができる『見えない力』の育成を目標としました」

GPとして掲げた「自立・創造・対話」を具体化するため、それぞれにキャッチコピーをつけることも、校内研修で出された生徒に身につけてほしい資質・能力の中で数が多かった7つの資

質・能力を振り分けた。

キャッチコピーには様々な案が出された。例えば「自立」のキャッチコピーの原案は「勉強はもう卒業」だったが、「知識・技能などの『見える力』の習得を軽んじるような文言にすべきではない」などの意見が上がった。進路指導主事の吉田恵美先生はこう振り返る。

「学びの自立を目指す点は全教師で共通理解ができていましたが、それが示す具体的な状態は教師によって異なる



井上貴智
教務主任
いのうえ・たかひろ
同校に赴任して2年目。地理歴史・公民科(地理)。



田村 晶
1学年主任
たむら・あきら
同校に赴任して2年目。英語科。

学校概要

設立 1899(明治32)年
形態 全日制/普通科/女子校
生徒数 1学年約280人
2023年度卒業生進路実績 国立大は、北海道大、東北大、筑波大、群馬大、お茶の水女子大、東京外国語大、大阪大などに175人が合格。私立大は、自治医科大、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ652人が合格。

りました。出された意見も踏まえてコア会議で議論した結果、「教わるから学ぶ」に決まりました」

生徒が自分で計画を立てて学ぶ時間を時間割に組み込む

SAHとしての同校の取り組みは、「3つのキーと9つの具体的な取り組み」から成る(P.12図4)。「大学進学に最適化した学習プログラム」を1つめのキーにしたのは、進学校としての使命を果たす意志を示すためだ。

生徒の学びの自立を支援する観点で策定した取り組みの1つが、生徒が自分で計画を立てて学ぶ時間を時間割に組み込んだ「Aタイム」だ。24年度は、5・6月に3時間ずつ実施し、年間では15時間実施する予定としている。教務主任の井上貴智先生はこう説明する。

「4月末に、全校生徒にAタイムの趣旨を説明し、自分に必要だと思う学びを出してほしいと伝えました。学びの例を出すと、それにとらわれてしまうと考え、あえて例を示しませんでした」

初めてのAタイムは、生徒も教師も、教師主導ではない授業に戸惑いがあった。しかし、3コマを1タームとし、「まとまりのある学びをデザインしよう」と教師が呼びかけると、生徒は次第に

その時間をいかに活用するかを考えて取り組むようになっていった。振り返りシートには、「計画を立てて有意義に使えた」などと書く生徒が多く見られるようになってきている。

「Aタイムは生徒の『学びの自立』が目的でしたが、自分に必要な学びを考える過程で自己や他者と『対話』し、自分に必要な学びを『創造』する、3つのGPにつながっていました」(中村先生)

24年度の夏季休業では、例年実施していた、教師が指導する夏季講座の代わりに、自分で計画を立てて学習に取り組む学習会を最初の1週間で実施。さらに、各教科で必須の課題を減らし、自習の例として、1学期の学習内容を基にした探究的な学びなどを示した。

「今までの指導をやめることへの戸惑いや、やめても進学実績を維持することができるといった不安は確かにあります。しかし、教師が与える課題で学びが完結するよりも、取り組む課題を自分で選び、学校内外で様々な体験をする方が、知識・技能が生きて働く資質・能力として身につくはずだ。教師は課題の準備がなくなった分、授業づくりや教材研究に力を入れます。その方が教育全体としてはプラスになると考えています」(吉田先生)

1 大学進学に最適化した学習プログラム

- 1 Aタイムの実施
- 2 長期休業中の個別最適な学びの支援 長期休業中に例年行っていた全員必修の講座をやめ、生徒が自分で計画して学べるよう、支援する。併せて、休業明けの学力テストもやめる。
- 3 学びの時間の確保 定期考査や土曜講座などを見直し、生徒が主体的に計画を立て、調整し、自ら学びに取り組む時間を確保する。
- 4 チーム担任制の実施

2 未来を創る・未来につながる探究学習

- 5 「総合的な探究の時間」の充実 フィールドワークなど、社会との接点を積極的に設け、生徒の興味・関心と社会課題を結びつけた探究学習を支援。総合型選抜の受験につなげる。
- 3 生徒が主体的に取り組む学校行事やグローバル活動
- 6 開校記念式典の企画・運営 有志の生徒による実行委員会を結成し、すべての企画・運営を生徒が担う。
- 7 高女SAH委員会からの提案・実践 有志の生徒約20人による委員会が、校則の見直しや自習室の利用など、学校生活にかかわる改善を提案。生徒の意見を聞きながら実現する。
- 8 生徒主体の修学旅行の検討 修学旅行の企画・運営に生徒が主体的にかかわる。
- 9 SAHの周知・徹底、評価・改善 SAHに関するポスター等の作成、学校のウェブサイトでの取り組みの発信。SAHの目的や成果等を広く周知。活動の不断の見直しを図る。

Aタイム (Agencyタイム、全学年で実施)

生徒が自分で計画を立てて学ぶ時間。24年度は年間15時間を設定。Aタイム当日の朝に活動計画を、終了後に活動の振り返りを担任に提出する。生徒は回を重ねるごとに活動を工夫しており、「科目にとらわれず、自分なりにバランスを考えて復習に取り組めてよかった」「時間を有効に使うにはどうすればよいか考えることができた」といった声が上がっている。

チーム担任制 (24年度は1年次のみ実施)

1年次の7クラスを3つのグループに分け、1グループあたり教師3~5人で担当。グループ内の各クラスの担任は2週ごとに交代し、面談は生徒が希望する教師が行う。生徒のよさや課題を複数の教師で多面的に見取ることができ、生徒への声かけが増えている。生徒の状況や連絡事項など、教師間の情報の共有が重要となる一方で、学級事務の負担が軽減されるメリットがある。

探究学習の実践例

小学校の教師を目指していた生徒は、探究学習を通じて、子どもが安心して過ごせる居場所づくりの大切さを学び、自分たちができることとして、小学生対象の交流会「高女教室」を企画・運営した。



※学校資料と取材を基に編集部で作成。

文化祭の時間短縮の判断に、生徒が提案を提示

生徒の主体的な活動は、23年度後半から活発化した。24年6月に開催した開校125周年の式典の準備を、有志の生徒10人から成る実行委員会が23年12月に着手。生徒の提案で、アメリカで活躍する卒業生に講演を依頼したり、学校の90年史を読み込み、学校の歴史をたどるクイズを作ったりした。

7月の椎樹祭(文化祭)では、生徒のエージェンシーが發揮された場面があった。2日目が猛暑日になり、学校は午後の企画の中止を判断。すると、代表の生徒が校長室を訪れ、丸橋校長に「体育館に来てください」と言った。「私が体育館に行くと、生徒たちが『中止にしないでください』と訴えてきました。泣いている生徒もいました。私が『じゃあ、どうすればよいか?』と尋ねると、生徒たちは午後の企画が実現できる案を示してきました。問題の解決に向けて懸命に知恵を出し合う姿は、私たちが育成を目指す生徒の姿そのものでした」(丸橋校長)

生徒の「自立・創造・対話」を支える環境づくりとして、24年度の1年次から始めたのが、複数の教師が複数のクラスを受け持つ「チーム担任制」だ。

1学年主任の田村晶先生はこう語る。「複数の教師で生徒を多面的に見取り、支援することができるようになりました。生徒は『いろいろな視点が見られる』『話しやすい先生が見つかる』などとチーム担任制を評価しています。どのクラスも特定の教師の色がなくなるため、例えば文化祭のクラス企画では、生徒は教師に頼らずに自分たちが思う通りに取り組んでいます」

24年度1学期末にGPに関する生徒の自己評価を実施したところ、例えば2年生(回答率57%)は、回答者の約半数が「自立・創造・対話」はそれぞれ「高まっている」と回答した。青木瑞代(あきみ ずほ)教頭は、振り返りの意義をこう語る。「生徒が主体性と自分勝手を履き違えないように、自分の言動が誰かのためになっているかどうかをメタ認知できることが重要です。授業や行事の振り返り、教師の声かけなどを通じて、生徒が自分を客観視することができるよう、支援していきます」

丸橋校長は、生徒がGPの改訂などに参画することも考えているという。「生徒は自立して行動することができる存在であり、学校をつくる一員として生徒と教師は対話をし、協働して本校の教育活動をよりよいものにしていきたいと思います」